様式第5-1号（第7条関係）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　名	石川 智朗
Comprehensive coagulation and fibrinolytic potential in the acute phase of pediatric patients with idiopathic nephrotic syndrome evaluated by whole blood-based rotational thromboelastometry ROTEM を用いた小児特発性ネフローゼ症候群患者の急性期における包括的 全血凝固線溶能	

論文内容の要旨

【背景】静脈血栓塞栓症は、小児期発症特発性ネフローゼ症候群（INS）では、非常に稀ではあるが、重篤な合併症である。したがって、予防的抗血栓療法の確立が非常に有益である。しかし、INS の急性期における血液凝固亢進状態の原因となるメカニズムは、解明されていない。予防的抗血栓療法の確立は、非常に有益である。

【目的】小児 INS 患者における全血での血液凝固系および線溶系の機能を評価する。

【方法】小児 INS 患者の初発例 22 名（初期群）、再発例 22 名（再発群）、および対照小児患者 15 名（control 群）の全血サンプルを、ローテーショントロンボエラストメトリー（ROTEM®）を用いて、凝固能および線溶能を評価した。初発群・再発群では、コルチコステロイド治療開始前（0 週目）に血液サンプルを採取し、加えて初発群では、開始後 1～4 週目にも採取した。凝固能と線溶能の評価には、それぞれ EXTEM と FIBTEM を使用した。凝固パラメータとして、Clot time（CT）、Clot formation time（CFT）、Maximum clot firmness（MCF）、α-angle を測定し、線溶パラメータとして、30 分および 60 分の lysis index（各々LI30、LI60）を評価した。

【結果】初発群の 0 週目と 1 週目および再発群では、control 群に比し、CT は有意に短縮し, MCF と α-angle は有意に大きかった。MCF は、血清アルブミン値（$r=0.70$、$p<0.001$）およびフィブリノゲン値（$r=0.68$、$p<0.001$）と相関していた。初発群の線溶パラメータ（LI30、LI60）は、0-4 週目全てで高値が持続し、control 群よりも高かった（$p<0.01$）。

【結論】本研究の解析結果から、小児期発症 INS 患者初発時の治療開始 4 週間の時点では、効果的なコルチコステロイド治療を行ったとしても、線溶能の低下は改善しないことが示された。さらに、ステロイド治療開始前と開始後 1 週間の期間では、血栓準備状態を呈していた。